沖縄県立博物館・美術館，博物館紀要（Bull. Mus., Okinawa Pref. Mus. Art Mus.), № 5，pp. 19－36，2012

久米島の水中文化遺産見学会報告

～海底遺跡ミュージアム構想の実践～

片桐千亜紀[1)]，山田浩久[2)]，崎原恒寿[3)]，中島徹也[4)]，宮城弘樹[5)]，渡辺芳郎[6)]

The Report of an Underwater Cultural Heritage Tour in Kumejima

—The Project of 'The Museum of Underwater Cultural Heritage'—

Chiaki KATAGIRI[1)], Hirohisa YAMADA[2)] Tsunehisa SAKIHARA[3)], Tetsuya NAKAJIMA[4)]
Hiroki MIYAGI[5)], Yoshiro WATANABE[6)].

1．目的

アジア水中考古学研究所は日本財団の助成を受けて2009年度から2011年度まで、「海の文化遺産総合プロジェクト」事業を実施している。これは日本全国の水中文化遺産データベースを作成することを主目的としている。日本列島の各海域を太平洋、日本海、瀬戸内海、九州地区、南西諸島に分け、それぞれの担当が各海域における水中文化遺産の調査・集成を行っている。標題の報告は、南西諸島海域は鹿児島大学法文学部人文学科物質文化論研究室と南西諸島水中考古学研究会が共同で実施した。本事業はデータベース作成という主目的の延長で実施された、いわば活用編である。具体的には2011年９月10日（土）データベース作成において得た成果の一部を、広く一般に公表するため、久米島において水中文化遺産見学会を実施した。

見学会は海底遺跡をコア施設（もしくはサテライト施設）として捉えた、いわゆるエコミュージアム構想である。外国ではイタリアのバイア遺跡（水没した古代ローマ都市）が有名である。日本では過去に長崎県五島列島の小値賀島前方湾において、アジア水中考古学研究所が主催して１度だけ実施されたことがあるのみであり、広く一般の方に海底遺跡を見学いただくのは容易でなく、気軽な見学ができない状況にある。

南西諸島においてデータベース完成の見通しができた段階で、データベースに掲載される水中文化遺産の見学会候補地を検討した。その結果久米島で確認されているオーハ島沖海底遺跡を中心にして、久米島での開催がより充実するのではないかと考えた。オーハ島をコアにした理由は、散布する遺物の密度、浅い水深、透明度、地元の対応環境が整っていた点が、南西諸島で初めて遺跡見学会実践する場所として最も適切と考えられた。本見学会の実施によって、一般の方にも広く久米島が誇るべきオーハ島沖海底遺跡の存在を知るきっかけとなり、且つ実際にその目で見学することによって、日本における水中文化遺産の保護・活用の先導になると考えた。

1) 沖縄県立博物館・美術館　〒900-0006 沖縄県那覇市おもろまち3－1－1
Okinawa Prefectural Museum & Art Museum, 3-1-1, Omoromachi, Naha, Okinawa, 900-0006 Japan
2) 宜野湾市教育委員会　〒901-2203 沖縄県宜野湾市野嵩1－1－2
Ginowan city board of education, 1-1-2, Nodake, Ginowan, Okinawa, 901-2203, Japan.
3) 恩納村教育委員会　〒904-0415 沖縄県恩納村字仲泊1656－8
Onna Village board of education, 1656-8, Nakadomari, Onna, Okinawa, 904-0415, Japan.
4) 久米島博物館　〒901-3121 沖縄県久米島町字嘉手苅542
OKumejima Museum, 542, Kadekaru, Kumejima, Okinawa, 901-3121, Japan.
5) 今帰仁村教育委員会　〒905-0428 沖縄県今帰仁村字今泊5110
ONakijin Village board of education, 5110, Imadomari, Nakijin, Okinawa, 905-0428, Japan.
6) 鹿児島大学法文学部　〒890-0065　鹿児島県鹿児島市郡元1－21－30
Kagoshima University　The Faculty of Law, Economics and Humanities,1-21-30, Korimoto, Kagoshima, Kagoshima, 890-0065, Japan.

また、既に沖縄総合事務局では、2007年度に海洋観光の振興策の検討を行った経緯があるが、今回の企画のような、海底における見学会は単体のダイビングポイントから、物語性をもった見学地として、観光振興に寄与すると潜在性を有するとともに、地域活性化の起爆剤になることが期待される。

（宮城　弘樹）

2．体制

主催：NPO 法人アジア水中考古学研究所（理事長：林田憲三）

共催：久米島博物館（館長：平田光一）

協力：

南西諸島水中文化遺産研究会（会長：宮城弘樹）

鹿児島大学法文学部物質文化論研究室（教授：渡辺芳郎）

イーフマリンホリデー（代表：小川真司）

イーフスポーツクラブ（代表：久米浩二）

（有）文化財サービス（所長代理：安座間奈緒）

期日：2011年９月10日（土）13:00～17:30

参加スタッフ：

林田憲三（アジア水中考古学研究所理事長）、高野晋司（アジア水中考古学研究所副理事、長崎県教育庁）、野上建紀（アジア水中考古学研究所副理事、有田町歴史資料館）金武正紀（貿易陶磁器調査研究所）、平田光一・中島徹也（久米島博物館）、渡辺芳郎（鹿児島大学）、片桐千亜紀（沖縄県立博物館・美術館）、山田浩久（宜野湾市教育委員会）、崎原恒寿（恩納村教育委員会）、小川光彦（アジア水中考古学研究所研究員）、山本佑司（水中カメラマン）、久米浩二・木浪豊信・唐木佑圭子（イーフスポーツクラブ）、小川真司（イーフマリンホリデー）

（片桐　千亜紀）

3．日程

準備、片付けを含め４日の日程で実施した。事前調整に入念な時間をかけ、検討を重ねていたため、当日はスムーズに進行することができた。詳細は第１表のとおり。

（片桐　千亜紀）

第１表　スケジュール

日付	概要	時間	内容
９月８日(木)	海底準備	９:00～14:00 14:00～17:00	オーハ島東岸グラスボートエリア。範囲設定、ブイ設置、矢印設置、遺物の清掃。 オーハ島南岸シュノーケルエリア。範囲設定、ブイ設置、遺物の清掃。
９月９日(金)	会場準備	９:00～17:00	久米島博物館にて遺物の展示、写真パネルの展示、パワーポイントチェック。
９月10日(土)	会場準備 見学会 全体	９:00～12:00 12:30～13:00 13:00～13:10 13:10～13:30 13:30～13:50 14:00～15:00	プロジェクター設置。イス並べ。会場設営。 受付。 開会式。あいさつ（林田理事長、平田館長） 講義（山田） オーハ島沖海底表採資料見学（渡辺、山田、金武）。中国スタイル碇石見学（中島、小川）。 関連陸上遺跡見学。天后宮、蔵元跡、真謝港（中島、山田）。
	A 班	15:20～15:50 16:00～17:00	奥武島にてシュノーケル練習（木浪、唐木）。 オーハ島（南岸）沖海底遺跡でシュノーケルによる見学（木浪、唐木、崎原、小川、野上、山本、高野）。
	B 班	15:00～16:00 16:15～17:00	北原の石切場跡見学（中島、山田、渡辺、金武）。 オーハ島（東岸）沖海底遺跡でグラスボートによる見学（中島、山田、渡辺、金武）。
	全体 海底片付	17:15～17:30 17:30～18:50	閉会式。あいさつ（金武）。 ブイ、矢印の撤去（小川、小川、野上、山本）。
９月11日(日)	会場片付 データ整理	10:00～12:00 13:30～17:30	片付け、展示遺物の移動等（中島他）。 アンケート集計、写真整理、分析等。

4．対象とした遺跡・見学会の内容・その概要

見学会は14世紀後半～15世紀初頭と考えられる中国陶磁器が多量に散布するオーハ島沖海底遺跡を核とした（写真１・２）。より良く遺跡を理解するための事前講習として、久米島博物館にて久米島の水中文化遺産に関する講習やオーハ島沖海底から実際に表採された陶磁器資料、宇江城から発見された碇石の見学を行った。さらに、関連する陸上文化財として天后宮・蔵本跡・真謝港・石切場跡等の見学も行い、オーハ島海底に遺跡が形成されたことの意義について勉強を行った。オーハ島海底遺跡見学会では、シュノーケル見学コース（Ａコース）とグラスボート見学コース（Ｂコース）に分け、２種類の見学方法を試みた。以下、見学会で利用した文化財の概要とその目的を記す。

①　久米島博物館

久米島博物館を拠点とし、受付・開会式を行った（写真３～５）。博物館では、見学対象の核であるオーハ島沖海底遺跡の内容と存在意義を理解するため、関連する久米島の歴史と文化、水中文化遺産の概要についてパワーポイントで事前講習を行った（写真６・７）。さらに、久米島博物館所蔵のナカノ浜・オーハ島沖海底遺跡表採の陶磁器を展示し、これから海底で見ることになる陶磁器の知識と経験を深めた（写真８・９）。また、宇江城発見の中国スタイル碇石を見学し、久米島近海を航行した巨大な貿易船について想像を促した（写真10）。

②　天后宮

陸上の文化財見学への移動は大型バスをチャーターし、Ａコース、Ｂコース一緒に移動した（写真11）。久米島町字真謝に所在する。県指定有形文化財。1756年、琉球王国の尚穆王冊封のため、中国より来琉途中の冊封使一行を乗せた船が台風にあい、真謝港沖で遭難する海難事故がおこった。島の人々により全員（200余人）救助され、無事那覇に到着、儀式を遂行することができた。その時の神の助けに感謝し天后宮を創建。実際に真謝港沖で船舶の海難事故がおこっていることを実感してもらう（写真12）。

③　旧仲里間切蔵元跡

久米島町字真謝に所在する。国指定重要文化財建造物。琉球王国時代の役所跡。1763年（乾隆28年）、地頭代宇根親雲上契時の頃、築かれたとされる。真謝港の近くに存在しており、グスクの石積を彷彿とさせるみごとな屋敷囲いが見られる。18世紀に描かれた『奉仕琉球図』「候風十日」に描かれている石積囲もこの蔵元跡だと推測される。海上交通の重要な拠点である港と政治を司る役所が近い位置関係に存在することを認識できる（写真13）。

④　真謝港

1630年、徳川家光に献上された『正保国絵図』に港として記載されており、18世紀に描かれた『奉仕琉球図』「候風十日」に描かれている場所も真謝港と推測される。進貢貿易を支える重要な港であったことがわかる。海岸には12世紀後半と考えられる中国産劃花文青磁を最も古い例として、15世紀を中心とする中国産青磁、近世の中国産青花、沖縄産陶器など、近現代に至るまで様々な時期の遺物が散布している。この港が12世紀から利用されていたことをうかがわせる。現在もその「港の景観」が良く残る（写真14）。

⑤　北原海岸の石切場跡

北原の海岸には大規模な石切場が存在する。遺構の保存状態は良好で、切り取る石材には複数の規格があったことがわかる。また、切り取る際の工具痕が残されている部分もある。聞き取り調査の結果、昭和初期までは利用されていたようである。海岸部に発達する石灰岩地域ならではの生産遺跡である（写真15）。沿岸部における久米島の資源利用とその方法を考える上で重要である。

⑥　オーハ島沖海底遺跡

オーハ島の東岸・南岸、水深約２ｍ前後の広範な海底に、14世紀後半～15世紀前半と考えられるおびただしい量の中国産陶磁器（龍泉窯系青磁中心）が散布している。器は青磁の碗や皿を中心として盤（巨大な皿）や白磁の皿などが見られる。貿易船の沈没や積荷の投棄によって陶磁器が海底に残されることになり、形成された海底遺跡と考えられる。

オーハ島からさらに東にあるナカノ浜沖海底には12世紀後半～13世紀前半と考えられる中国産陶磁器が散布しており、この海域が船舶にとって危険な暗礁地帯だったことを証明する。シュノーケル及びグラスボートでの見学会の様子と詳細については、５及び６を参照。

⑦　泊フィッシャリーナと再び久米島博物館

シュノーケルやグラスボートでの見学終了後、船の乗降場所であった泊フィッシャリーナにて閉会式を行った（写真16）。その後、バスにて再び久米島博物館へ移動し、アンケートの記入（写真17）をお願いし、見学会を終了した。

以上のように、久米島には12世紀後半からの利用が考えられ、進貢貿易にも利用されていた重要な港である真謝港を核として、役所である蔵元跡や実際の海難事故の記録でもある天后宮があり、集落からは過去に中国スタイルの碇石が確認されたという。その東に延びるハテノ浜は船舶にとっては危険な暗礁地帯であり、実際に２ヶ所で異なる時期の海難事故が原因となって形成された海底遺跡が確認されている。このように、久米島は古港と海底遺跡、陸上遺跡を有機的に関連させて理解し、見学することができる重要なエリアであり、南西諸島で初めての水中文化遺産見学会として充実した見学会が開催できた。

（片桐　千亜紀）

５．シュノーケル見学の方法と様子

５-1．見学地の設定・準備

まず初めに、シュノーケル見学地及びグラスボート見学地のコース設定をするため、遺物が見学しやすい範囲を検討した（写真18）。オーハ島南側のコース予定地においてシュノーケルで遺物の密集している範囲を探した。密集している範囲には簡易的な小ブイを設置し、船の上から遺物が密集している範囲を検討し、そこを長方形状に囲いコース範囲とした。コースの四隅に大型のブイを固定し、ブイ間にガイドロープを設置して見学コースとした（写真19・20）。

海底の遺物にはコケや砂が被っていたので、見学者に見やすくするために遺物を動かさないように表面の掃除を行った（写真21）。

また、海底では慣れていないと遺物を探すことが困難なため、遺物の場所を分かりやすくするための目印となる「矢印」を作成し、海底に設置した（写真22～24）。

清掃作業と同時並行で遺物の密集地に設置した小ブイの回収を行い見学地の準備を終了した。

５-2．見学方法

シュノーケルの見学方法として、事前に奥武島の海岸で、シュノーケルの練習を実施した。Ａ班16名の見学者を２つのグループに分けてインストラクターの指導のもとシュノーケル及び注意事項、緊急時の対策等についての練習を約40分実施した（写真25～27）。

シュノーケルの練習後に２船で見学地まで移動し、見学会の開始となった。まず、最初のグループがガイドロープ沿いにインストラクターの案内のもとで見学し、後列のグループは時間差をつけて見学会を始めた（写真28～32）。水中では、待機していた２名の潜水士により水中にある遺物をピンポールで示すなどして分かりやすく見学できるように努めた（写真33・34）。船上には監督者及び待機要員と船長が待機しており、各グループの先頭にインストラクターの誘導及びグループの周りをスタッフが囲むことによって、見学者がグループから離れないように配慮した。

見学者の様子として、全体的に海底にある遺物を発見することができて、とても喜んでいた。中には、潜水してみたいという人もでてきた。コースの中で遺物が観察できるエリアだけでなくオオジャコの化石がある地点、クマノミポイントなども含めたことで、水中文化遺産と、久米島の自然にも楽しく触れながらシュノーケルを体験していただいた。シュノーケル見学会は、約40分であっという間に終了となった（写真35）。

見学者からは、「久米島の海底にこのような焼物があるとは知らなかった。」、「参加できてとても楽しかった。」などとても好評であった。「また参加したい。」などの意見も多数寄せられた（写真36）。

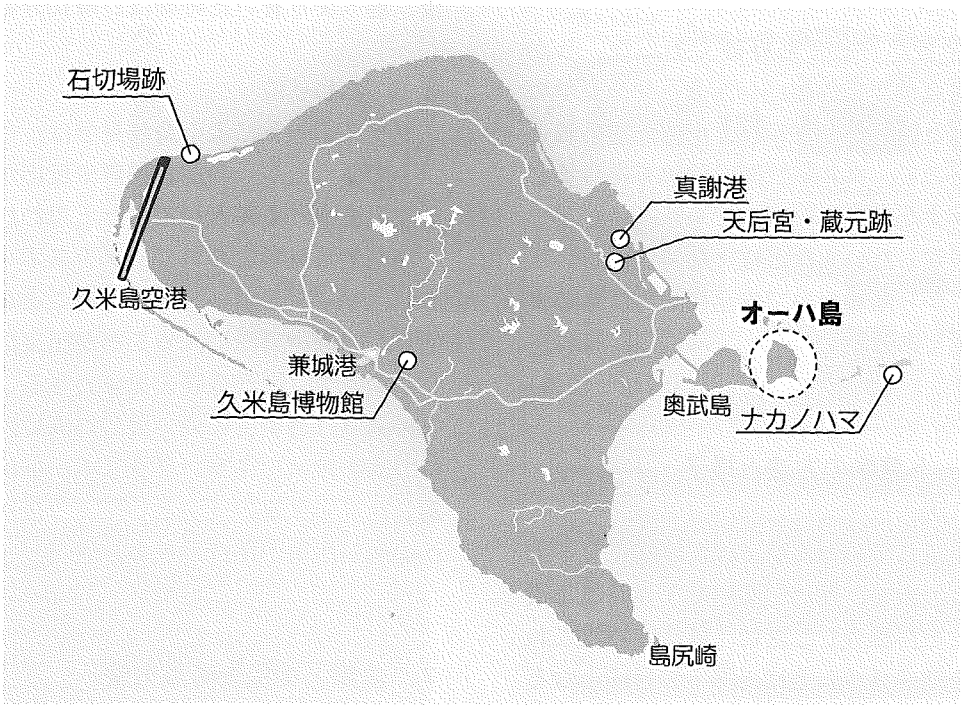


図１　久米島の水中文化遺産見学地。

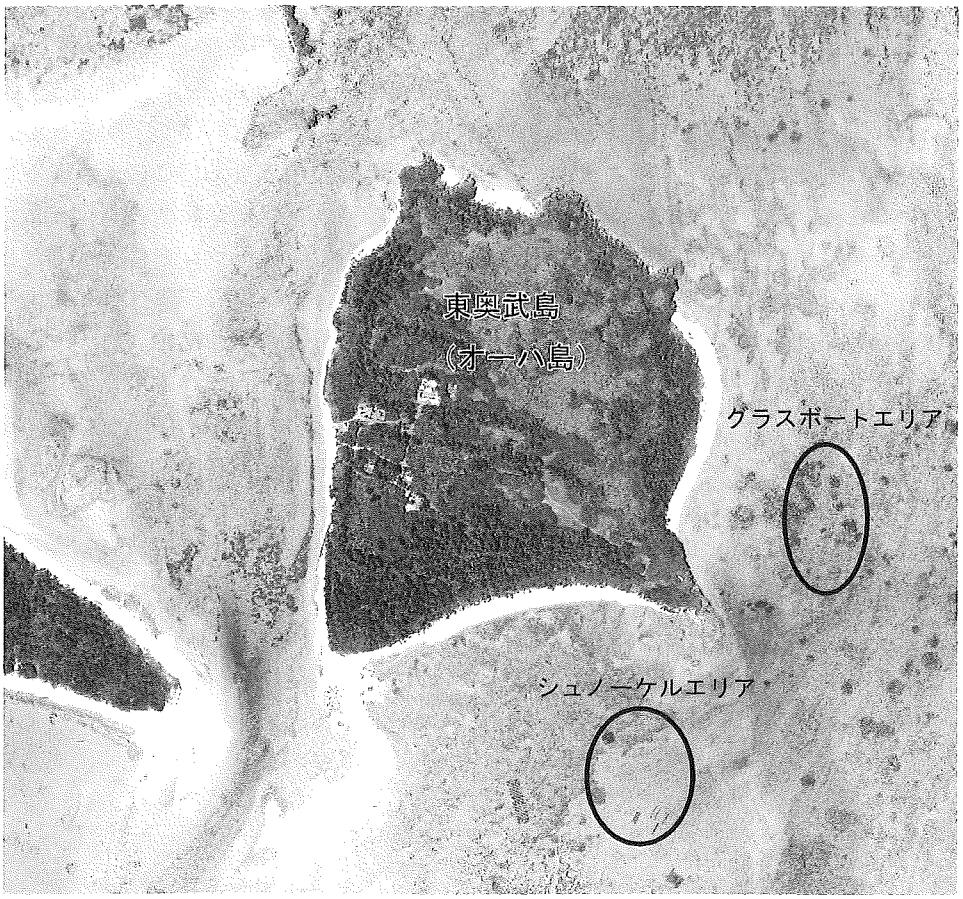


図２　シュノーケル・グラスボート見学地。

5-3. 課題

全体的に見学者からとても好評であった。しかし、課題点も何点かでてきた。シュノーケル見学の最後には、前列と後列とのグループが混在する形となってしまったので、グループ間の間隔をあける必要があること。また、グループ内でも泳ぐのが早い人、じっくり観察したい人など様々な見学者がいたため、グループから離れないで安全に見学できるような誘導が必要である。

（崎原　恒寿）

6．グラスボート見学の方法と様子

6-1. 見学の方法

遺跡見学を予定している海域では、事前に見学会の準備を行った。まず、遺物が集中して見られる幾つかのポイントを再調査し、次に、確認されたこれらのポイントを結ぶライン上に、海上の目印となるブイを設置した。その後は、このライン下で散見される各密集ポイントに、重りを付けた矢印パネルをそれぞれ設置し、遺物の表面に被っていた砂を払う清掃作業を併せて行った。

遺跡見学の方法は、事前に設置したブイの傍で一旦ボートを止めて見学を行い、近くのブイまで移動する際は、ブイを結ぶラインから逸れないようボートを調節してもらいながら、見学ができる速度で流した。この行程を繰り返し行い、最終的には一往復半の見学を行った。なお、見学時には当時利用されていた港や航路・海域環境等を含めた遺跡の説明も併せて行った。

6-2. 見学の様子

今回利用したグラスボートは、最大で25名が乗ることができる船である（写真37）。当ボートには、見学者18名、見学会スタッフ４名、操縦者１名の計23名が乗船した。

港からは16時30分頃に出発し、約10分後には見学開始地点に到着した。遺跡見学は約20分間行った。当日は海面も穏やかで、海中の透明度も良好であったことから、見学者全員が海底に沈んでいる遺物を見学できたようである（写真38・39）。また、見学者からは驚きや発見した時の喜びなどの声が聞け、遺跡見学を楽しむ反応が窺えた。上記の見学行程終了後、港へ戻り着いた時刻は17時10分頃であった。

6-3. おわりに

グラスボートによる遺跡見学は、今回が初めての試みであったが、参加者の声や反応から、概ね良好な成果を挙げることができたと思われる。

海底遺跡見学において、グラスボートの最大の利点は、マリンスポーツを行ったことがない、または何らかの理由で海に入ることが出来ない方でも、安心かつ安全に海底遺跡を見学できることである。

沖縄県は透明度の高い美しい海に囲まれた環境を持つ島嶼地域である。グラスボートは、この環境に適した見学手段の一つとして、今後も多くの方たちへの有効活用が期待できる。

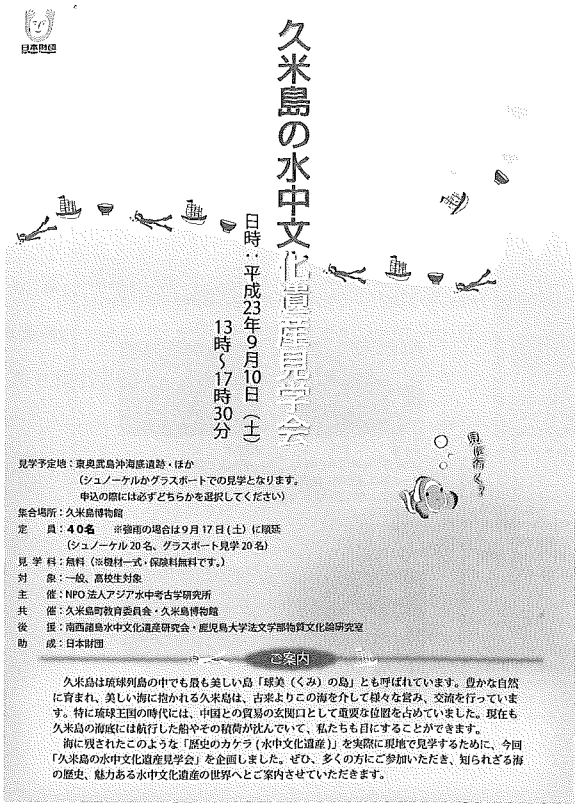
（山田　浩久）

7．広報と参加者募集方法

今回の見学会は、シュノーケルとグラスボートの２コースを合わせて40名定員とし、高校生以上の町在住者を対象としたことから、一般的な町内でのイベント開催の場合の参加者募集とは異なる方法を取った。

まずは、広報資料として配布するＡ４サイズの両面チラシを作成した。このデザインは（有）文化財サービスの安座間奈緒所長代理に依頼し、とても好評なデザインのチラシを作成することができた（図３・４）。チラシ等のデザインについては、センスが明らかに反映されるため、良いセンスを有する専門家に依頼することはかなり有効である。さらに、当日の資料として対水用の紙を使って、久米島の水中文化遺産に関する概略的な資料を作成した。こは、Ａ４サイズ両面で、三つ折りとした（図５・６）。

次に募集方法だが、通常募集を行う場合、町広報や各新聞社でのイベント告知を行う他、町内各所へのポスター掲示や新聞折り込みで周知を図る。今回の水中文化遺産見学会は、沖縄県で初の試みであったことから、久米島の未来を担っていく教師や高校生にも多く参加して貰いたいと考えた。そのため、久米島高校へ出向き、見学会についての事前説明と学生及び教職員全員にチラシを配布した。その結果、見学会参加者の約１／４が教職員及び高校生となり、一定の目的を達することができた。この他、



日本財団

久米島の水中文化遺産見学会

日時：平成23年9月10日（土）
13時～17時30分

見学予定地：東奥武島沖海底遺跡・ほか
（シュノーケルかグラスボートでの見学となります。
申込の際には必ずどちらかを選択してください）
集合場所：久米島博物館
定　　員：**40名**　※強雨の場合は9月17日（土）に順延
（シュノーケル20名、グラスボート見学20名）
見 学 料：無料（※機材一式・保除料無料です。）
対　　象：一般、高校生対象
主　　催：NPO法人アジア水中考古学研究所
共　　催：久米島町教育委員会・久米島博物館
後　　援：南西諸島水中文化遺産研究会・鹿児島大学法文学部物質文化論研究室
助　　成：日本財団

ご案内

久米島は琉球列島の中でも最も美しい島「球美（くみ）の島」とも呼ばれています。豊かな自然に育まれ、美しい海に抱かれる久米島は、古来よりこの海を介して様々な営み、交流を行っています。特に琉球王国の時代には、中国との貿易の玄関口として重要な位置を占めていました。現在も久米島の海底には航行した船やその積荷が沈んでいて、私たちも目にすることができます。

海に残されたこのような「歴史のカケラ（水中文化遺産）」を実際に現地で見学するために、今回「久米島の水中文化遺産見学会」を企画しました。ぜひ、多くの方にご参加いただき、知られざる海の歴史、魅力ある水中文化遺産の世界へとご案内させていただきます。

図３　チラシ表。

図４　チラシ裏。

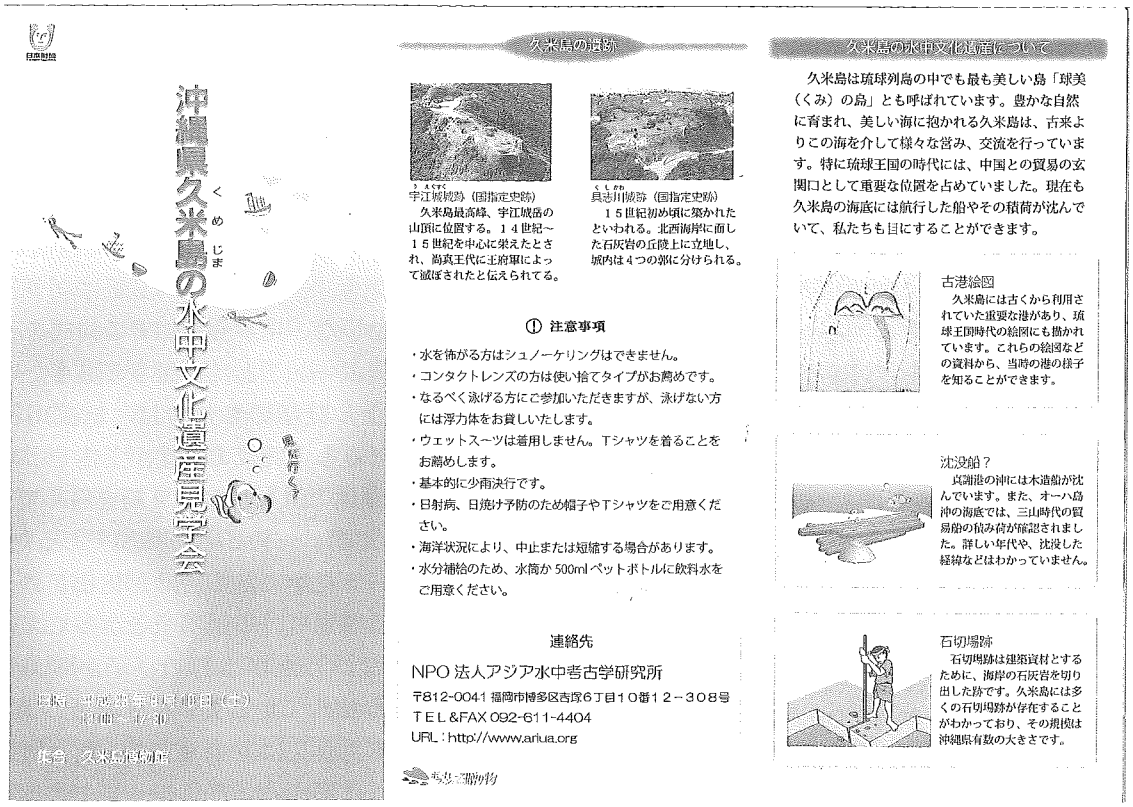


図５　防水資料表。

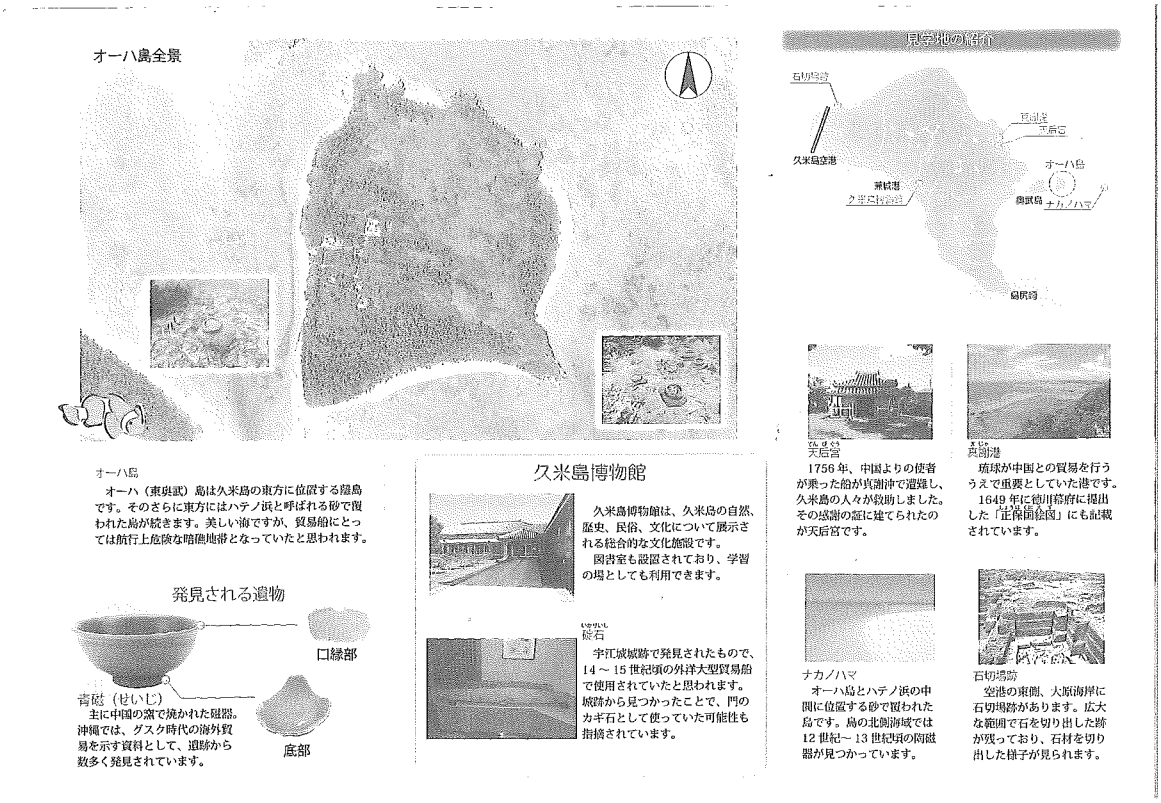


図６　防水資料裏。

役場、町内各字公民館等でのポスター掲示と町役場及び町観光協会 HP へ参加者募集を行った。

以上の結果、当日のキャンセルがあり40名の定員を割ったものの、一時はキャンセル待ちが出るほど反応が良かった。

定員と参加対象者による制約があったため、広報範囲を狭めたが、その割には参加者も多く、水中文化遺産見学会への町在住者の関心が高いことが明らかとなり、広報方法によっては島内外から多くの参加者が見込まれることが分かった。

なお、今回見学会について県民へ広く紹介するため、地元のテレビ局や各新聞社へ取材依頼を行った。見学会直前に依頼したため、当日取材は難しかったものの、県内新聞社及び久米島町広報で見学会の様子が紹介され、今後の広報に役立つものと期待される。

（中島　徹也）

８．参加者の構成

水中文化遺産見学会の参加者は、総人数34人であった。その参加者のほとんどが久米島在住及び出身者で占めている。久米島博物館で開会式、山田氏による講習、オーハ島海底採集の遺物見学、博物館見学を経て、陸上の水中文化遺産関連史跡の見学後、Ａ班はシュノーケル見学へＢ班はグラスボート見学へと移動した。見学会参加者の構成をシュノーケル、グラスボートごとに検討していきたい。

シュノーケル見学の参加者は、総数16名であった。世代別でみると20代の女性が主体を占めており（図７）、男女比では女性が約９割を占めていた（図８）。高校生１名、一般15名の参加であった。

グラスボート見学の参加者は、18名であった。アンケートでは参加者の年齢不明者が多く、正確な情報が得られなかったが当日の様子から50～60代の方々が多く参加している傾向にあった（図９）。また、参加者の男女比は、半々であった（図10）。

全体を通した傾向として、シュノーケル見学者は20代が多く、グラスボート見学者は、50～60代が多

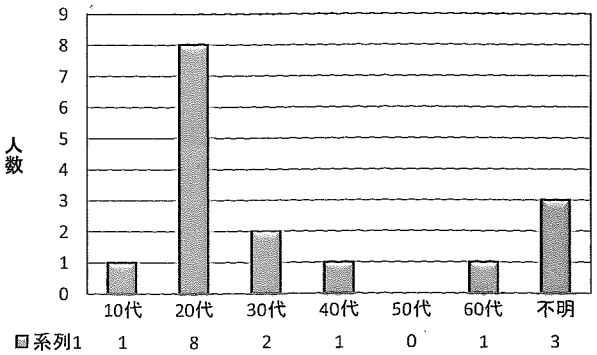


図７　世代別シュノーケル参加者。

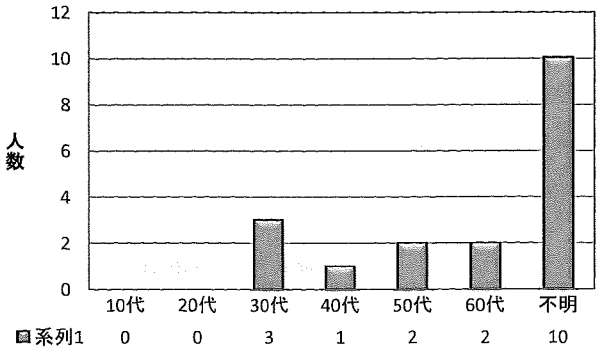


図８　世代別ガラスボート参加者。

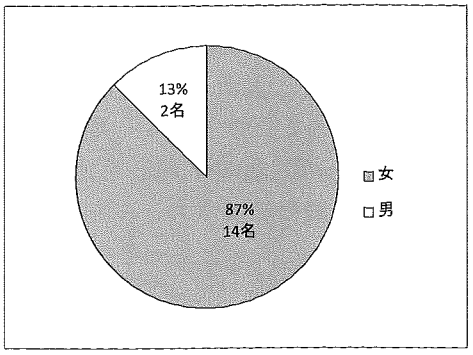


図９　男女別シュノーケル参加者。

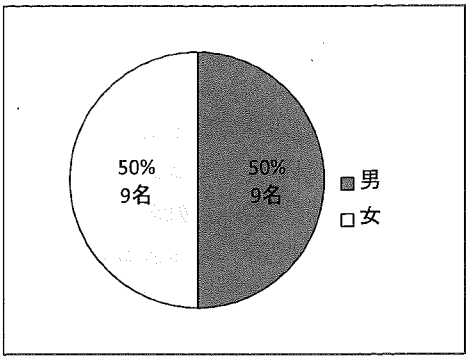


図10　男女別グラスボート参加者。

い結果となった。このことから水中文化遺産の見学方法により参加する年代も分かれる傾向がみられた。

（崎原　恒寿）

９．アンケート結果の分析

９-1．はじめに

今回開催した「久米島の水中文化遺産見学会」の参加者が、どのような感想や意見を持ったのかを知ることは、今後同様な見学会を企画していく上で重要なことである。アンケート調査は、その重要な情報を得るための有効な手段である。

アンケート調査は見学会終了後の当日に、見学会参加者（久米島町在住の高校生・一般）を対象にＡ４サイズの用紙（図11）で行った。アンケート用紙には、見学会参加者総数34名中、32名の回答が得られた（回収率94.1%）。なお、本稿ではアンケート用紙に記載した質問項目を便宜上、上から順に、質問１・質問２・・・と任意に付して扱うこととする。なお、質問１は個人情報のため、質問２については前節で述べられていることから共に割愛する。

（氏名）　よろしければご記入ください。

（性別）（年齢）　よろしければご記入ください。
男　・　女　（　　歳）

（コース）どちらかに○をつけてください。
グラスボート　・　シュノーケル

・水中文化遺産（海底遺跡）の印象をお聞かせください。

・見学会の感想をお聞かせください。

・今回のような見学会を企画したしたら、また参加を希望されますか。
希望する　・　希望しない

・こうした方がよいなど、改善点がありましたら、お願いいたします。

ご協力ありがとうございました。

（お知らせ）
水中文化遺産についてシンポジウムを開催いたします。
ぜひ足をお運びください。
「海に沈んだ歴史のカケラ～南西諸島の水中文化遺産の世界～」
日時：平成23年10月8日（土）12：30開場　13：30～17：00
会場：沖縄県立博物館・美術館（博物館講座室）
入場：無料　定員100名（先着順）

図11　アンケート用紙

9-2. アンケートの回答内容と結果

今回の見学会の構成は大きく二部に分けられる。前半部は、久米島博物館内での講座とオーハ島沖海底遺跡より採集された遺物や館内に展示されている碇石などの資料見学となっており、後半部は屋外での文化財や遺跡の見学となる。後半部の見学ルートは、天后宮、旧仲里間切蔵元跡、真謝港を廻った後、シュノーケル見学コース（Aコース）とグラスボート見学コース（Bコース）の二手に分かれる。Aコースはシュノーケル講習を経て、オーハ島の南沖で遺跡の見学に入り、Bコースはさらに北原の石切場跡を見学した後、グラスボートに乗りオーハ島の東沖で遺跡の見学を行った。

なお、Bコースは石切場跡を見学するために島内をバスで一周する経路になることから、移動している間は、水中文化遺産関連の遺跡（ソナミの烽火台、宇江城城跡、伊敷索城跡、旧具志川間切蔵元跡、具志川城跡）や、港（兼城港、大和泊）の紹介も行った。

上述のように、後半部の途中より見学ルートが分かれたことから、コースによって意見や感想等が異なる内容が散見された。そのため、以下には各質問に対する回答例をコース別に紹介する。

質問３：（コース）どちらかに○をつけてください。
グラスボート・シュノーケル

この二者択一の質問に対してはアンケート回答者全員（各コース16名）が記入している。

質問４：水中文化遺産（海底遺跡）の印象をお聞かせください。

Aコース回答例

・普段、何気なく見ている海に遺跡があったなんて、すごくおどろきの発見で感動しました。（女性・20代）
・こんな身近に貴重な遺物があると知ることができてとても良い体験になりました。自分でも見つけられたので楽しかったです。（女性・20代）
・よく見ないと分からないので、ほとんどの人は気づかないですよね。でも、何百年も昔の物が見られるなんてステキです。（女性・30代）

Bコース回答例

・島で生活していながら、存在を全く知らなかったので、おどろきでした。（女性・30代）
・初めて存在を知った。大変貴重なもの。久米島の宝物。（男性・60代）
・600年前のものが残っていることにおどろきました。もっとくわしく調べてほしい。　（未記入）

質問４の回答内容は上記のように、両コースとも「驚いた」「初めて知った」、「楽しかった」、「貴重な（良い）体験、経験になった」・「良かった」などの回答が多く得られた（図12）。今回の見学会が、参加者にとって、水中文化遺産（海底遺跡）について初めて知る機会になっただけでなく、実際に遺跡を見学することによって、興味・関心を持つ機会にもなったことが概ね窺える。

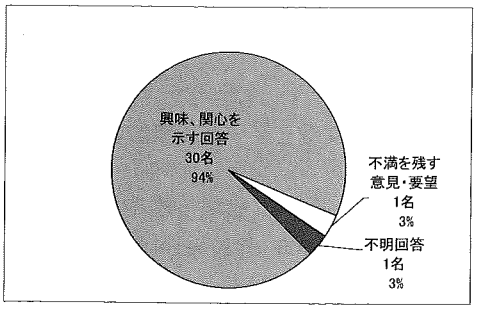


図12　質問４に対する回答。

質問５：見学会の感想をお聞かせください。

Aコース回答例

・すごく楽しかったです。勉強になりました。（女性・20代）
・初めに遺跡の説明があったうえで回ったので内容がわかりやすく、遺跡をより身近に感じました。（女性・20代）
・このような勉強会が無料で受けられるのは本当に有り難いです。久米島の魅力が益々分かり、好きになりました。（女性・20代）
・こういう機会がないと知らなかっただろうし、見ることや考えることもなかったと思うのでよかったです。（女性・30代）
・今度、海へ行った時には注意深く海底を見る様になると思います。色々な見方ができると思うと楽しいです。（女性・40代）

・関連する文化財も多くあって、久米島の新たな部分を知る機会になりました。
（女性・40代）
・博物館での解説を聞いてから実物を見たのでとても分かりやすく、印象も強く残りました。（女性・未記入）

Bコース回答例
・今度はシュノーケリングで遺跡を見学したい。（女性・20代）
・コースもおもしろく、昔の久米島を考える見学ができた。（男性・20代）
・出発前に色々な解説があったり、水中だけでなく陸の文化遺産も見れて充実していた様に思います。（女性・30代）
・充実していて、楽しかったです。宇江城など色々な説明をしてもらえたのが良かった。（女性・30代）
・とてもいい企画でした。水中文化遺産以外の案内も良かった。（男性・40代）
・名企画。今後も入れてほしい。遺跡から交易時代に思いをはせ楽しかった。（男性・60代）
・企画がよく、運びがよく、非常によかったです。（男性・60代）

質問５では、質問４と同様に、両コースとも見学会に対して興味や関心を示す回答が多く得られた（図13）。また、上記の回答例のように見学会の流れや、企画自体に対して好感を持って頂けた内容も窺える。その一方で、不満を残す意見や要望も幾つかあり、この中には、今後の検討課題となるような回答内容が見られた。これについては質問７で扱うこととする。

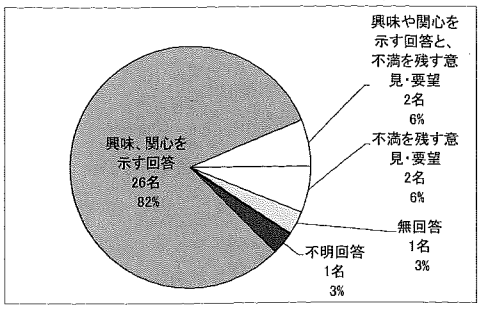


図13　質問５に対する回答。

質問６：今回のような見学会を企画しましたら、また参加を希望されますか。（希望する・希望しない）

この二者択一の質問に対しては、回答者全員から「希望する」との回答が得られた。質問４・５・７で不満を残す回答をした見学者からも、水中文化遺産に対しての関心や興味が窺える。

質問７：こうした方がよいなど、改善点などありましたら、お願いいたします。

この質問に対しては、９名の方から不満を残す意見・要望の回答が得られた（図14）。しかしながら、当質問に該当する回答を、別項目（質問４・５）で記入された方や、２つ以上の要望を挙げられた方がいた。そのため、ここでは要望が多かった回答や、今後課題となるような回答をまとめて紹介する。
なお、同様な内容を示す回答については、まとめて１件として扱うこととする。

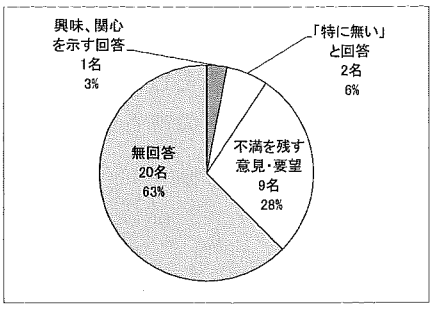


図14　質問７に対する回答。

Aコース回答例
・泳いでいるときにも説明があったら良かった。沈んでいるものをもっと間近で見たかった。（女性・20代）

Bコース回答例
・グラスボートに乗るまでに少し時間がかかりすぎる気がします。（女性・未記入）

A・Bコースに共通する回答例
・日なたでの説明は体力的につらかったです。（女性・未記入）
・ガイドの説明の時ハンドマイク等があればもっと聞きとりやすかった。（男性・20代）
・時間を短縮するといいと思います。（男性・40代）

今後の課題となる回答例として上記の６件が挙げ

られる。この中で最も多かった要望は、Aコースの「シュノーケル見学時の説明が欲しい」・「海底に沈んでいる遺物をもっと近くで見たい」と両コース共通の「見学会の時間を短縮して欲しい」の3件（各2名回答）であった。

シュノーケル見学では、水中に顔を浸けて見学するため、説明しながら案内することは困難である。そのため、今後は水中に見学会用の解説板を設置するなどの検討が必要と考えられる。

また、海底に沈んでいる遺物を「もっと近くで見たい」などの要望に関しては、埋蔵文化財の慎重な取り扱い事由や、海底の砂埃の巻き上げ等による他の参加者の見学阻害等について理解して頂けるような説明が必要と思われる。

Bコースに対しての上記の回答例は、恐らくグラスボート見学が予定時刻よりも遅れたことについての指摘と推測される。今後は、同様な見学会を実施するにあたり、時間配分等についても気を付けて案内することを心掛けたい。

両コースに共通する課題として、上記のような回答が3件得られた。これらの声も今後の検討課題として念頭に入れておきたい。

9-3. おわりに

アンケート調査の結果、今回の見学会は、概ね良好な成果を挙げることが出来たと考えられる。しかしながら、検討しなければならない課題や要望も幾つか見られた。今回得られたアンケートの声を参考に、今後は可能な範囲で改善し、見学会の向上を図っていきたい。

（山田　浩久）

10. 総括

遺跡の発掘調査や研究において、その遺跡が所在する地域の方々の理解と協力は必要不可欠である。ましてや遺跡の保護・活用においても言うまでもない。そしてその理解・協力を得るため、遺跡に直接触れることのできる機会・方法として調査説明会や遺跡見学会が定着している。

陸上の遺跡であろうと水中（海底）の遺跡であろうと、地域住民の理解・協力が不可欠であることは同じである。しかしその方法のひとつである遺跡見学会は、水中文化遺産の場合、やはり「水（海）中」という、遺跡へのアクセスの困難さが障壁となっていることも事実である。また「泳げる／泳げない」「潜れる／潜れない」という個人的スキルの差も大きい。

今回の見学会では、その「敷居の高さ」を解消するために、水の透明度が高く、水深の浅い地点に遺跡があるという好条件を活かして、シュノーケル見学とともに、グラスボート見学を取り入れた。また変化の激しい海底の状況を考慮して、直前に遺物散布地域の確認とブイや指示板の設定、遺物の清掃など、入念な準備も行った。さらに遺跡の性格や現状について、事前講習を実施したことも意味が大きい。とくに海岸で採集された陶磁器片を見学会の前に見てもらうことで、「海底にどのようなものが散布しているのか」ということをイメージしておいてもらったことにより、見学者が「遺物を自分で見つける」喜びを得られたのではないかと思う（もっとも私もグラスボートから海底遺跡を見学するのは今回が初めてだったので、「見つける喜び」を一番味わっていたのは、じつのところ私自身だったのかもしれない）。さらに地元のダイビングショップの方々からさまざまなご協力を得られたことも特記しておきたい。

以上のように、本見学会は一般市民向けの水中文化遺産見学会として、ひとつのモデルケースを提供できたと思う。しかし今回の事例が、どこまで一般化し敷衍できるかについては検討課題も残る。2点挙げたい。

(1) 今回の見学者は基本的に久米島町在住の方に限定させていただいた。まず地元の方の理解を求めるという目的によるものだが、今後、より幅広い形で見学者を募る場合、安全管理面をはじめとして、より多様で緻密な運営体制が求められるであろう。

(2) 先に「水の透明度が高く、水深の浅い地点に遺跡があるという好条件」と書いたが、今回の見学会はそれゆえにこそ実施できたという側面がある。この好条件は、今後、ファンダイブとの連携などの可能性を有するが、必ずしもそのまま他の水中文化遺産に適用できるものではない。むしろ水の透明度が低く、水深の深い水中文化遺産の方

が多く、そのような遺跡での見学会をどのように企画・実施していくか、ということを、諸外国の事例を参照しながら模索する必要がある。

本見学会が水中文化遺産に対する一般の方々の理解の向上につながれば幸いである。

（渡辺　芳郎）

謝辞

本見学会を実施するにあたって、久米島博物館の平田光一館長、アジア水中考古学研究所の林田憲三理事長、高野晋司副理事、野上建紀副理事、小川光彦氏、山本祐司氏、（有）文化財サービスの安座間奈緒氏、イーフマリンホリデーの小川真司氏、イーフスポーツクラブの久米浩二氏、久米島高校教諭譜久村照代氏に多大なご協力を賜った。末筆ながら記して感謝申し上げます。

※写真撮影

写真１・30～34・40　山本祐司

写真37～39　渡辺芳郎

参考文献

沖縄総合事務局（編）2003年『海洋観光資源の利活用方策に関する調査（報告書）』

野上建紀・ペトレッラ ダニエ　2007年「バイア海底遺跡見学記」『金大考古』59号　金沢大学

久米島町教育委員会文化課（編）2004年『久米島の文化財』久米島町教育委員会

アジア水中考古学研究所（編）2007年「海底遺跡見学の開催と水中考古学の推進」『アジア水中考古学研究所会報号外』

写真１　オーハ島沖海底遺跡上空からの景観

写真２　遺跡の様子

写真３　受付

写真４　久米島博物館長あいさつ

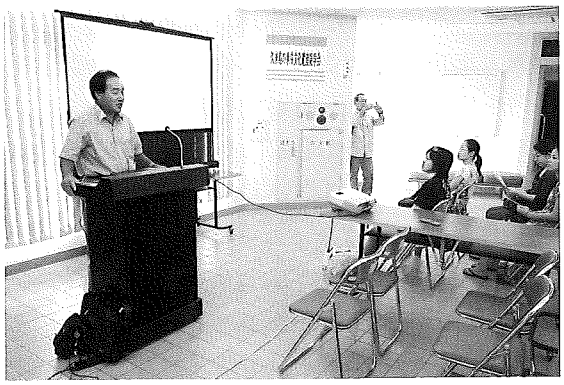


写真５　アジア水中考古学研究所理事長あいさつ

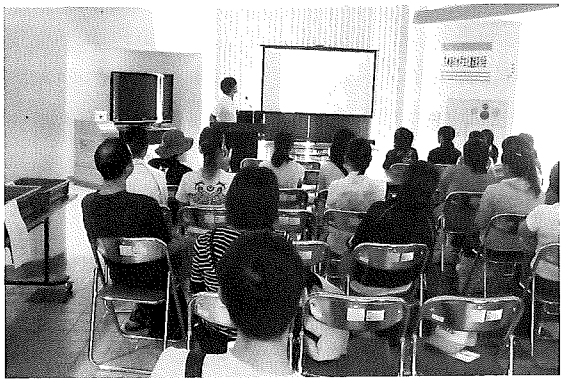


写真６　久米島の水中文化遺産講座

写真７　熱心に聴く受講者

写真８　オーハ島沖表採資料の見学

写真９　資料見学と位置解説

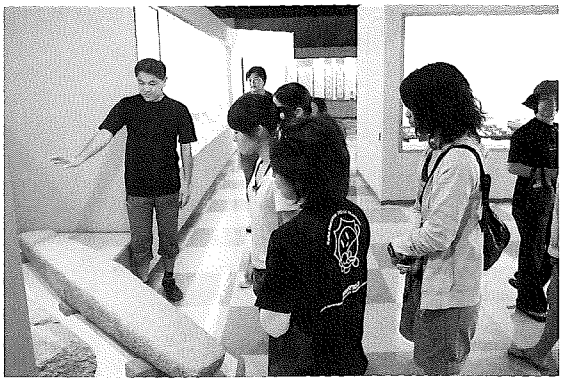


写真10　宇江城で発見された碇石説明

写真11　バスにて移動

写真12　天后宮の見学

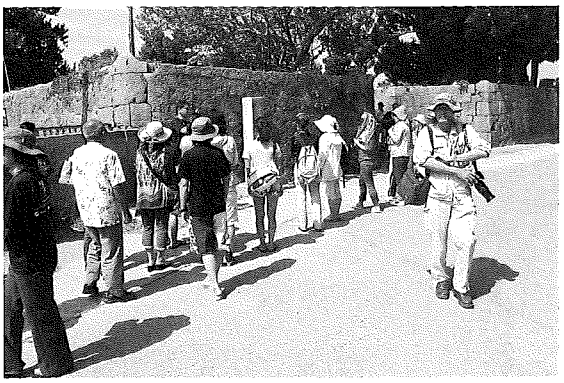


写真13　蔵元跡の見学

写真14　真謝港

写真15　北原の石切場

写真16　閉会式の様子

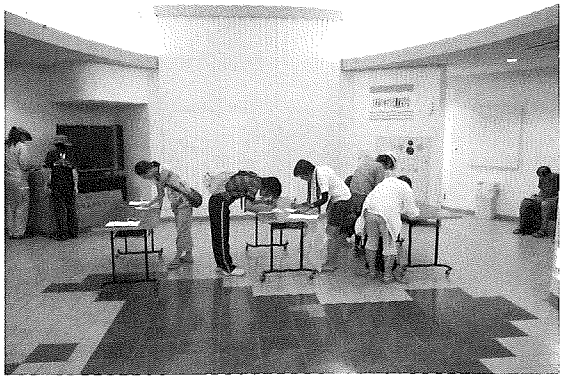


写真17　アンケートの記入

写真18　見学コースの検討

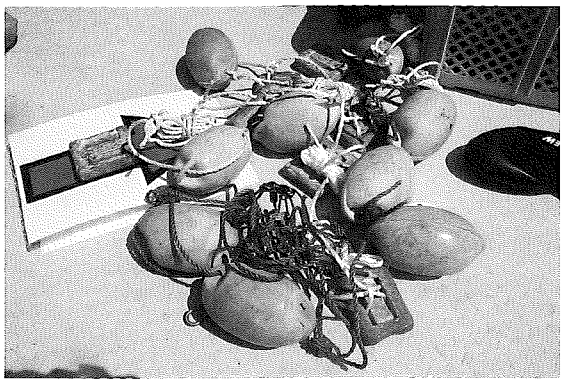


写真19　ブイの作製

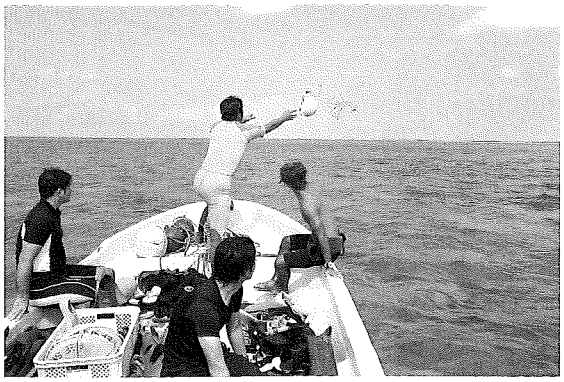


写真20　ブイの設置

写真21　遺物の清掃

写真22　矢印の作製

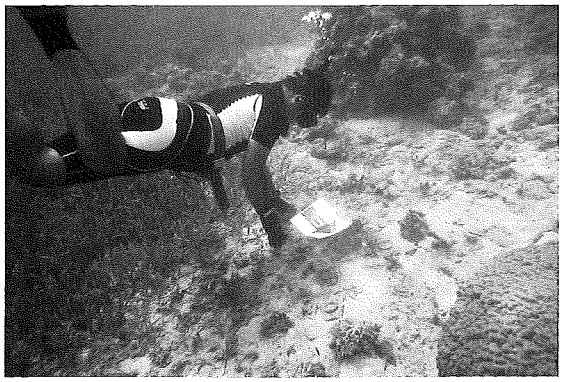


写真23　矢印設置

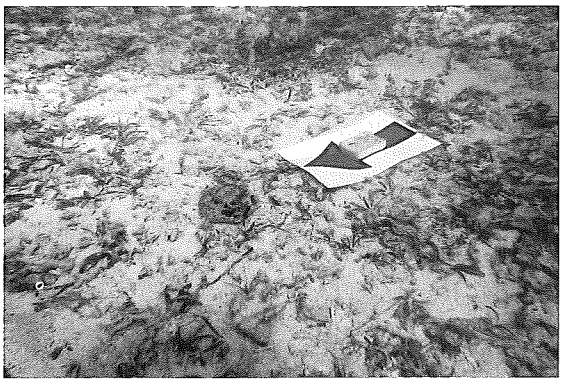


写真24　設置された矢印と遺物

写真25　乗船

写真26　シュノーケル練習１

写真27　シュノーケル練習２

写真28　海底見学開始！

写真29　シュノーケル見学１

写真30　シュノーケル見学２

写真31　シュノーケル見学３

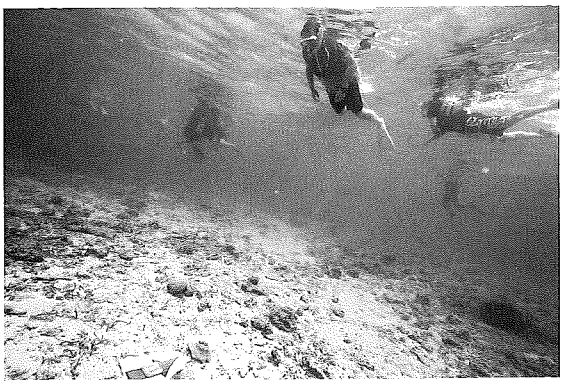


写真32　シュノーケル見学４

写真33　遺物を示すダイバー１

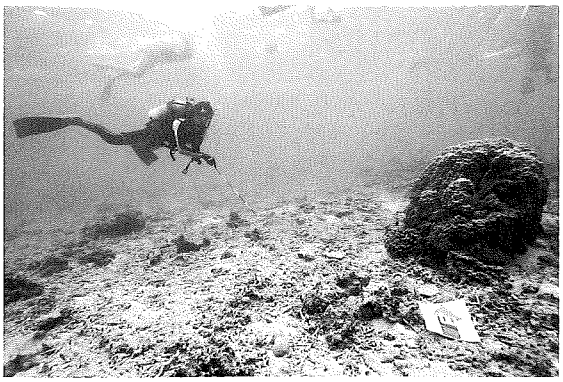


写真34　遺物を示すダイバー２

写真35　シュノーケル終了

写真36　お疲れ様でした

写真37　グラスボート

写真38　グラスボートでの見学

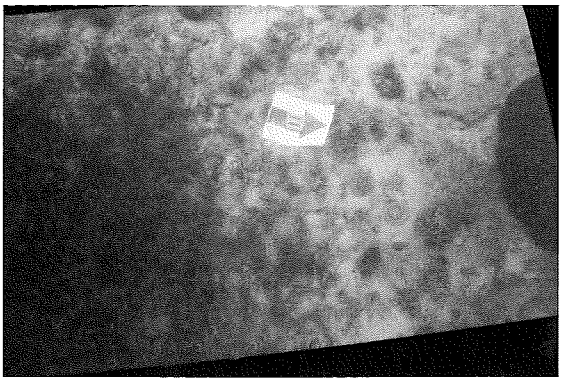


写真39　グラスボートからの見え方

写真40　久米島上空からハテノ浜を望む